

東海道の宿場町としての大津

大津は古くから、近接している京都の玄関口とされてきました。江戸時代には、江戸（現在の東京）と京都を結ぶ東海道の最後の宿場町として大津が置かれたことで、玄関口としての地位がより正式なものとなりました。

東海道は、江戸と日本各地を結ぶ五つの公式に認められた街道のひとつでした。将軍が江戸に、天皇が京都にいたため、両都市間の移動が容易であることに重きが置かれました。徳川幕府は五街道を整備し、それに沿って宿場を設け、役人や旅人が旅の途中で休む場所を確保しました。大津は、東海道（沿岸ルート）の53番目で、最後の宿場町に指定され、より距離の長い内陸の中山道の終点でもありました。

大津は、武士や貴族だけでなく、巡礼者や商人、芸術家の拠点となったのです。昔ながらの木造の町家がある繁華街には、旅館や茶屋、商店などが軒を連ねていました。おもてなしの心とは別に、大津は織物で有名で、多くの旅行者は京都に入る前に服をより良いものに着替えようとしていました。大津から東海道沿いに多様な事業が広がり、大津百町、または大津の百の町と呼ばれるようになりました。

江戸時代初期には、地元の絵師たちが絵を描いて旅人のお土産として販売するようになりました。当初は宗教画として描かれていましたが、やがて自由奔放な作風に変化していきます。作品はすぐに人気を博し、大津絵と呼ばれるようになりました。